



# 北九州総合病院への異動と 新病院建築に携わって 思ったこと

北九州総合病院 院長 永田 直幹



消化器外科医になりたくて産業医科大学第1外科に入局したのが1983年（昭和58年）6月で、月日の過ぎるのは早いもので医師免許を貰いまして33年の歳月が経ちました。3年目に1年間出向した三菱化学病院外科と1989年から1991年にコネチカット州エール大学に留学した2年間の計3年間のみ大学から離れた期間がありましたが、2008年12月まで約26年間大学での薄給に耐えてきました。2005年から約3年間、教授選考という渦に巻き込まれ浮いたり沈んだりしまして、その後はその渦から飛ばされたこともあり、2009年1月からは北九州市小倉南区にあります北九州病院グループの急性期病院である北九州総合病院へ異動することになり、7年前に新天地へ副院長（外科総括）として赴任した次第です。

北九州病院グループは8病院と1老人保健施設からなる約2,645床を有する西日本有数の大きな医療機関です。当院は地域災害拠点病院であり北九州市で救命救急センターに指定された2施設の病院の一つで、病床数は360床、臨床研修病院で初期研修医20名と医師80名からなる高度な救急医療、

検査や治療・手術を行う急性期病院です。周辺には同じグループの療養型の病院がいくつかあり、連携をとりながら医療にあたっています。当院は原則として断らない医療を行っていたため当初は大学との違いに戸惑いましたが、手術を行い、患者中心の医療を行うことができ、とても楽しく外科医をやっていました。約1年半が経ちまして、何故かわかりませんが2010年6月から院長になってしまいました。その後は慣れない経営や人事等を行いつつ、院長を引き受ける際に事務系の皆さまには迷惑をかけたのですが、会議、委員会はすべて早朝に行い午前8時半までに終わらせるように改革をし、今まで通りに手術（ほとんど腹腔鏡下手術）と外来（消化器癌の化学療法）を続けながら、院長職を日々こなしてまいりました。

2011年3月11日の東日本大震災を契機に危機管理や災害対策が重要視され、当院の一部の病床が建設後30数年経過しており、現在の耐震基準にはそぐわないために病床の耐震化と新棟建設を進めることが決まりました。その当時、北九州市が環境（公害）や福祉（高齢化）など日本が直面する

課題に他都市に先駆けて取り組んで来たことから、国から環境未来都市に選定され、「人のつながり」、「多世代が暮らし続けられる」、「ゼロ・カーボン」と「子育て支援・高齢者対応」の街づくりコンセプトをもった地区を開発していました。街全体で二酸化炭素の排出を極力抑える城野ゼロカーボン先進街区での開発を始めており、その地区での医療や健康管理の核となる病院として当院と都市再生機構との間で話し合いがなされて土地取得が可能となったため新病院建築が決まりました。

その後は、街づくりのコンセプトである、ゼロカーボン、子育て支援と高齢者対応の観点、次代に継承し続ける持続可能な街づくりの視点から当院の設計や構造などが計画されました。当院は救命救急センターをもつ地域災害拠点病院であるため、東日本大震災での教訓から72時間は病院としての機能を維持できる様なシステムを基本にいたしました。免震構造で、災害時に備えてのエネルギーの多重化を図り、すなわち電力、都市ガス、重油（備蓄）を組み合わせることでインフラ途絶時にも72時間は医療機能を維持できるようにしまし

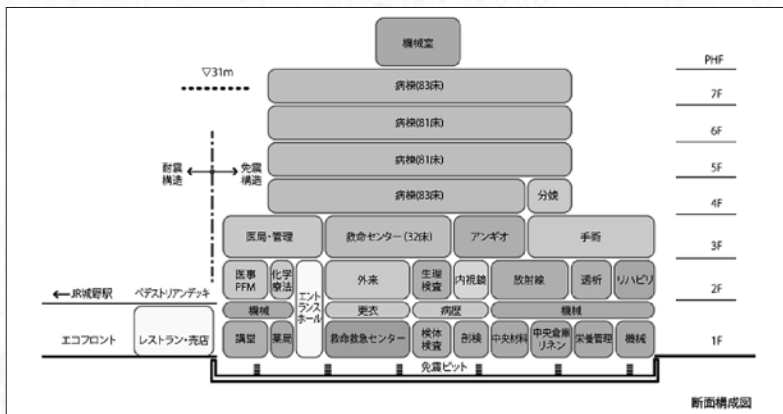


図1 わかりやすい階構成と機能分離した縦動線



図2 病棟個室 (CG)  
各病室は4床室的個室で、ベッドサイドに窓、壁掛けテレビ、収納冷蔵庫、洗面台を備えています。

た。また市水道が途絶した場合も水源の備蓄機能から濾過することで上下水道の確保を行う機能を備えています。エネルギーと水資源を無駄なく使用する工夫を採り入れた病院作りに取り組みました。

さまざまなことを学びながらストレスの多い3年間が経過しましたが、その中で学んだことを新病院建築に生かすために、医療従事者に対して、1) 使いやすい環境としてわかりやすい階構成と機能分離した縦動線(図1)、2) 患者さんにはわかりやすい病院の環境、そしてストレスのない病室の構造作り(図2)、3) 人と地球環境に優しい省エネルギー計画(図3)、ができればと思ひましてそのことも設計会社に頼み最終的な当院の設計が出来上がりました。

### 1) わかりやすい階構成と機能分離した縦動線

アクセスの良い低層部(1~3階)には診療部門を、静かで眺めの良い高層部(4~7階)には病棟を配置して明快な階構成としました。車で来られる方は1階から、JRを使用して来られる方は2階から直接病院に入っていただける玄関を設けて迷われることなく2階の総合案内まで案内できます。関連の深い部門を隣接または積層エレベーター等で結ぶことにより、迅速な動線を確保しました。

### 2) 将来変化に耐えうる、明るく健康的な病室計画

病室のベッドサイドには窓を配置し、明るく健康的な病室作りに配慮しました。病室のほとんどが無料個室で、患者さんの重症度に

応じた病室の振り分けや各個室のプライバシーとアメニティ性を高めました。

### 3) 人と地球環境に優しい省エネルギー計画

設備と建築が一体となったさまざまな工夫で、風、光や熱といった自然の恵みを十分に取り込んだ快適な療養環境を保ちながら先進の設備システムの採用により、電気やガスなどの使用量を低く抑えて環境に優しい計画としました。

以上の様なコンセプトで新しい病院作りに立ち会うことができました。

早いもので、約3年経ちまして新病院が出来上がります。今年の3月23日に竣工式が行われ、また3月30日に城野ゼロカーボン先進街の街開きが開催されまし

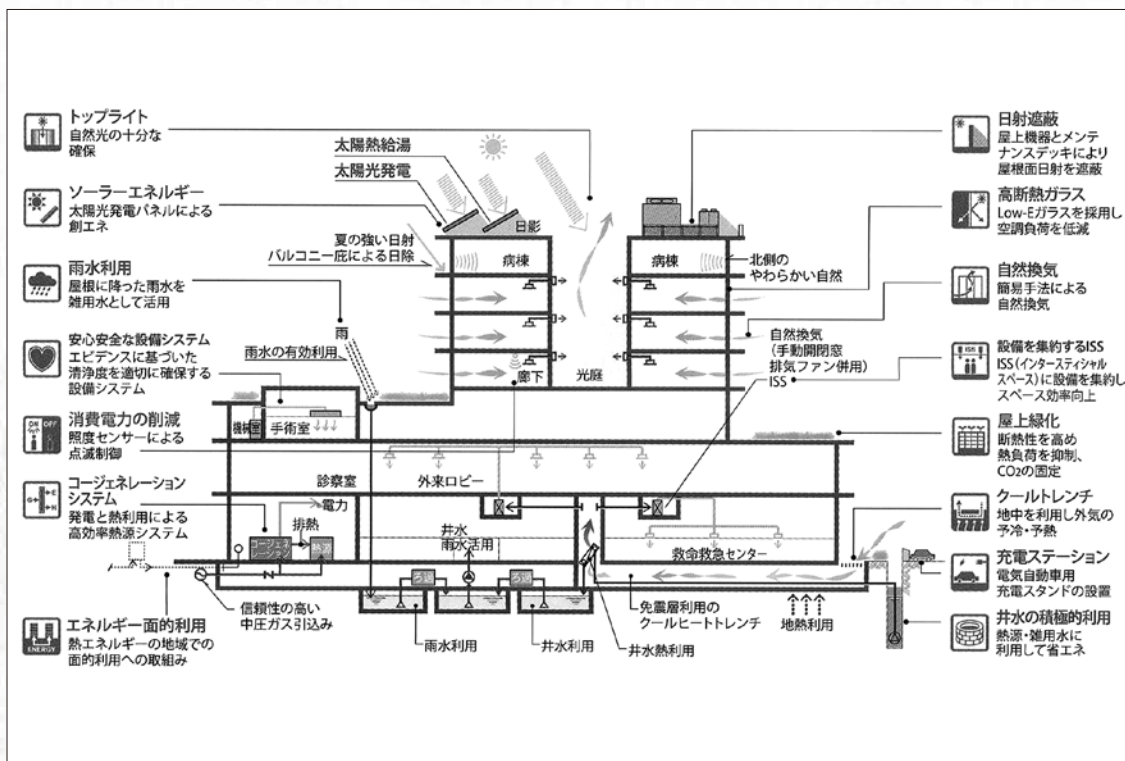


図3 人と地球環境に優しい省エネルギー計画

た。現在は細分の仕上げの確認と5月1日の引っ越しの準備に追われています。今回は院長という立場で病院の移転とまた新病院の立ち上げに立ち会うことができ、なかなか経験ができないことと思いましたが、ただ、あまりにも大きなプロジェクトのために、また初めての経験でもあるので、ストレスと不甲斐なさを感じたのも事実です。新病院が5月9日からフルオープンとなります。

今後は地域のための総合病院として標準的な医療を高いレベルで提供し、今まで以上に機動性・柔軟性・透明性を高め、より効率的な病院運営を実現する必要があると感じています。取り組んでいくべき課題は多々ありますが、患者さん中心の質の高い医療を提供す



る病院として、職場が明るく活気あるものになるよう整備を進め、さらに地域住民の方々や開業医の先生との連携を大切し、精進した

と思っています。